事故頻発学童の特性に関する研究

研究第5部　石　川　英　夫

I　問　　題

事故による幼児・児童の死亡は年々増加の傾向をたどり、厚生省の調べによると、1才以上の幼児・児童においては、いずれも事故が死亡原因の第1位にあげられている。事故の中でも、特に近年増大しているのは交通事故であるが、最近の警察庁の調査によると、1970年1年間の交通事故の死傷者は、5才未満で41,765人、5才から9才で52,664人、10才から14才で24,437人の多きに達している。

このように、事故というものは、最悪の場合は尊い一命を失うような恐ろしい結果に至るものであり、生命を失わないまでも、いろいろな心身の機能の障害をもたらし、本人はもちろん、その家族までが暗たんたる気持でその一生を送らなければならないこともある。

そのほか、日常の家庭の内外でおこる小さな事故については、統計は皆無なためわからないが、その数はおびただしいものとなるであろう。

ところで事故とはいかなる現象であろうか。けがは怪我と書く。これはもちろんあて字であるが、事故の心理構造をよくあらわしている。すなわち、怪我は「われをあやしむ」、つまり自我が不安定になることである。また怪は「乖」に通じ、「乖」とは「そむく」こと、常識、理法に反することである。すなわち、怪我とは自我があやしくなって、各種の精神機能の調和的作用が乱れ、正常な行動をとることができなくなって、それに反した行動をとったときにおきる現象ということができよう。つまり、平静なときにはとれる行動がとれなかったり、平静なときとは異なった行動をとったり、あるいは環境が予期に反する方向に作用して、環境と自我との均衡が破れたときなどに事故は発生するのである。

人間の生活において最も基本的なことは、人間が自己自身とそれを取巻く環境との関係を適切に調整することにある。すなわち、これが適応という問題であるが、この関係は Lewin, K. のいう人間一般の行動の基本法則である B＝f（P．E．）の公式であらわされる。すなわち、人間の行動Bは人Pと環境Eとの相互の函数関係の中に具現するものであり、この関係の完全な調和をはかるところに人間の最適行動が実現されるのである。

そして、この関係の調和が破れたときに、いわゆる広い意味での不適応行動が生ずるわけであるが、事故という現象も正にその1つであり、何らかの意味でこの関係に不調和が発生し、そのために適切な行動がとれなかったことを意味するのである。したがって、事故を防止するには、PとEを規定する因子を探求し、PとEとの相互の関係の間に存する欠陥を補足あるいは除去することが必要である。

それでは子どもの事故について、このPとEを規定する因子としていかなるものが考えられるであろうか。子どもの事故については、今まであまり研究がなされていないので、その因子を指摘することは困難であるが、一応つぎのようなものをあげることができよう。

$$B=f(P.E.)\begin{cases} P=f_1(D.\,Co.\,W.\,Ca.)\begin{cases} D=f_2(In.\,Ch.\,Se.\,Mo.) \\ Co=f_3(Di.\,Fa.) \\ W=f_4(Moo.\,Int.) \\ Ca=f_5(Ag.\,Ex.) \end{cases} \\ E=f_6(Na.Ph.\,To.So.)\begin{cases} Na=f_7(Te.\,Hu.\,We.\,Li.) \\ Ph=f_8(Ge.\,Eq.) \\ To=f_9(Pl.\,Im.\,Cl.) \\ So=f_{10}(Fa.\,Fr.) \end{cases} \end{cases}$$

ただし

D. 素質、In. 知能、Ch. 情意的素質、Se. 感覚機能、Mo. 運動機能

Co. 心身状態、Di. 疾病、Fa. 疲労

W. 意欲、Moo. 気分、Int. 興味

Ca. 経歴、Ag. 年令、Ex. 経験

Na. 自然、Te. 温度、Hu. 湿度、We. 天候、Li. 明暗

Ph. 物理、Ge. 地理、Eq. 設備

To. 道具、Pl. 遊具、Im. 器材、Cl. 衣服

So. 社会、Fa. 家族、Fr. 仲間

この分析はきわめて不充分なものであるが、これをみても、1つの事故に関与する各因子の相互関係は、きわめて複雑多岐に錯綜していることが明らかであろう。

本研究では、子ども自身ならびに家庭環境における諸要因に事故を惹起する有力な要因が存すると考え、この面の事故要因の解明を目的とし、よく事故をおこす子どもを事故頻発児と仮称し、その特性を、無事故児と対比しつつ、各種の心理テストにより明らかにしようとするものである。それによって、子どもの安全を図る事故防止対策の樹立へのワンステップとしたいと思う。

Ⅱ 方　　法

調査対象は、4年以上の小学生で、事故頻発児（以下事故児と称する）80名、無事故児90名である。事故児とは、小学校入学以来全治10日以上の怪我を2回以上経験したことのあるもの、ならびに学校の保健カードに5回以上の事故記録のあるものとし、小学校の先生に選出してもらった。ただし、心身の障害のあるものは除外した。無事故児とは、特別の事故経験のないもので、性、年令、知能、家庭条件等で事故児と対応させて先生に選出してもらった。

これらの調査対象は、東京都内の5つの小学校ならびに福島県の農村の3つの小学校からえらばれた。

これらの対象に田研式親子関係診断テスト・児童生徒用、Y-G性格検査および Rosenzweig, S. の P-F スタディ（絵画欲求不満テスト）を実施した。これらのテストは、放課後教室において実施された。

Ⅲ 結果と考察

1. 親子関係

親子関係が子どもの精神的安定に大きな影響を与えることは、すでに多くの研究によって明らかにされているところであるが、事故発生時の心的構造は結局は精神のアンバランスと考えられるところからして、親子関係の失調が事故の発生と関連をもつと仮定される。

そこで、親の子どもに対する態度を、子ども自身がどのように把握しているか、そして事故児群と無事故児群とでその親の態度に相違がみられるかを、田研式親子関係診断テストによってうかがってみた。

田研式親子関係診断テストは、親の望ましくない態度を拒否、支配、保護、服従、矛盾の5つに分類し、さらにこれらの態度をそれぞれ2つの型に分けている。

子どもが認知した父親および母親のタイプを事故児と無事故児で比較すると、第1表のような結果がえられた。すなわち、両群の間に5％の危険率で有意差が認められたのは、父親については干渉型と盲従型であり、期待型も有意差に近い値を示している。母親については消極的拒否型において有意差が認められ、期待型がそれに近い値を示している。

さらにこの親のタイプを大きくまとめた5つの親の態度については、第2表のような結果となり、母親の支配的態度においてのみ、事故児と無事故児の間に有意差が認められた。

つぎに、田研式親子関係診断テストは、第2部において、子どもに認められる問題徴候を子どもに自己評価さ

第1表　子どもからみた親のタイプ（実数）

タイプ ＼ パーセンタイル ＼ 親グループ		父 事故児	父 無事故児	母 事故児	母 無事故児
1. 消極的拒否型	0 ～ 20	9	7	21	8
	21 ～ 40	13	13	15	25
	41 ～	53	66	46	57
2. 積極的拒否型	0 ～ 20	15	10	19	15
	21 ～ 40	5	6	15	10
	41 ～	55	70	46	65
3. 厳格型	0 ～ 20	14	7	14	7
	21 ～ 40	11	12	16	22
	41 ～	50	67	50	61
4. 期待型	0 ～ 20	6	1	9	3
	21 ～ 40	6	4	8	7
	41 ～	63	81	63	80
5. 干渉型	0 ～ 20	8	4	13	6
	21 ～ 40	13	6	14	14
	41 ～	54	76	53	70
6. 不安型	0 ～ 20	8	7	13	17
	21 ～ 40	8	10	9	8
	41 ～	59	69	58	65
7. 溺愛型	0 ～ 20	12	14	13	16
	21 ～ 40	7	8	15	9
	41 ～	56	64	52	65
8. 盲従型	0 ～ 20	10	6	11	11
	21 ～ 40	3	8	5	3
	41 ～	52	72	64	76
9. 矛盾型	0 ～ 20	10	9	18	9
	21 ～ 40	12	11	13	17
	41 ～	53	66	49	63

注：パーセンタイルの0～20は危険地帯、21～40は準危険地帯

第2表　子どもからみた親の態度（実数）

態度 ＼ 親（グループ／パーセンタイル）		父 事故児	父 無事故児	母 事故児	母 無事故児
拒　否	0 ～ 40	29	27	45	43
	41 ～	46	59	35	47
支　配	0 ～ 40	26	22	43	31
	41 ～	49	64	37	59
保　護	0 ～ 40	22	21	38	34
	41 ～	53	65	42	56
服　従	0 ～ 40	19	29	28	30
	41 ～	56	57	52	60
矛　盾	0 ～ 40	22	20	31	26
	41 ～	53	66	49	63

第3表　子どもの自己評価（平均数）

	事故児	無事故児
A　反社会性	9.8	7.9
B　非社会性	4.9	5.0
C　自己評価・興味意志の問題	5.1	6.0
D　退 行 性	1.6	1.5
E　神経質・神経的習慣・神経症	5.7	5.8
F　生活習慣	5.2	4.1
G　学力・能力	3.5	3.1

せているが、その結果をみると第3表のとおりで、事故児と無事故児の両群の間に有意差の認められるのは、反社会性と生活習慣についてであり、事故児群にこれらの問題徴候が多く示されている。

以上の結果から、事故児は父親あるいは母親との間に失調をきたしていると一応いうことができよう。家庭生活における親の子どもに対する態度が、一般的に子どもの正常健全な発達に大きな影響を与えるだけでなく、ここで問題にしている事故という問題に関しても、その発生の一つの要因となっていると考えることができる。

まず、子どもが認知した父親の態度については、干渉型、盲従型、期待型の3つのタイプにおいて、事故児群と無事故児群の間に有意差ないしそれに近いものが認められたことは注目されなければならない。これによって、父親が予想以上に大きな影響を子どもに与えていることがうかがわれる。

干渉型からおこる子どもの問題としては、自主性ならびに忍耐力の欠如、責任転嫁、依頼心が強く、他の子どもとの接触の制限からくる社会的成熟の遅れ、これによる孤立、社会的不適応などがあげられる。盲従型では、自己統制力の欠如、自己中心的で協調性がなく、自立性ならびに創造性の欠如、他人の援助の期待、無責任で、規則的生活に耐えられないなどが考えられる。期待型においては、学業その他の訓練に対する抵抗、現実からの逃避、劣等感や不適応感などがあげられる。

母親については、明確な差が示されたのは消極的拒否型だけであったが、日常子どもとの接触の多い母親の場合には父親以上の差が示されることが期待されたが、意外な結果であった。この消極的拒否型からおこる子どもの問題としては、乱暴、攻撃的、非協調性、非行、異常行動、神経症的傾向などがみられる。

これらのことが、事故をおこしやすい子どもとどう関係してくるかを考えてみる。

第1に親の干渉が強い場合は、消極的、優柔不断となり、躊躇逡巡して、とっさの行動がとれなくなり、このことが直接的に事故行動に結びつく。また、干渉が強いと社会的成熟がおくれ、友人との遊びの仲間に入ることが困難となったり、あるいは仲間に入っても協調的に行動することができず、さまざまな摩擦をおこし、不安定な状態を発生さす。

第2に、親からちやほやされ、家庭で王様になっている子どもは、自己統制力が欠如し、利己的、自己中心的態度が家庭外に出てもあらわれ、仲間と衝突し、また情緒的にも不安定となり、注意散漫になり、いらいらして事故をおこしやすくなる。

第3に、親の期待が大きすぎる場合、すなわち学業に関して能力以上のことを要求したり、子どもの将来に過度の期待をかけたり、あるいは高い道徳的要請をしたりすると、子どもはこれらの親の圧力に反発、抵抗し、それが、父親の旅行などによる不在期間、また遊び仲間、学校生活など親から離れて比較的のんびりできる状態あるいは場所で、一時に爆発し、乱暴したり、無軌道な行動となってあらわれてくる。そこで事故が発生する。

第4に、親からの疎外感、愛情欠如感があるときは、親の愛情をえようとして自己顕示的行動、たとえば乱暴非行、異常行動に出る。このことは子どもの自己評価の反社会性においてもよくあらわれており、事故を惹起する大きな原因になっていると思われる。

以上を通して考えると、これらの親の態度は、一般に子どもの精神のバランスを失なわせているということができ、これが事故をおこす原因の1つとなっていると思われる。

2. 性格特性

事故児に、無事故児とは異なる性格特性が見出せるかどうかを明らかにするために、両群に児童用Y-G性格検査を実施して比較した。

Y-G性格検査は、D（抑うつ性）、C（回帰性傾向）、I（劣等感）、N（神経質）、O（客観性がないこと）、Co（協調性がないこと）、Ag（愛想の悪いこと）、G（一般的活動性）、R（のんきさ）、T（思考的外向）、A（支配性）およびS（社会的外向）の12の性格特性を測定する尺度からなり、プロフィールの全体的傾向からA型（平均型）、B型（不安定不適応積極型）、C型（安定適応消極型）、D型（安定積極型）およびE型（不安定不適応消極型）の5つの類型を判定するしくみになっている。

まず、12の尺度の粗点の平均を事故児群と無事故児群と比較すると、第4表のような結果がえられ、さらに関連した尺度をまとめた6つのグループ（因子）で比較すると、第5表のような結果がえられた。

これらについて、差の検定をおこなったが、いずれも統計的には有意な差ではなかった。しかし、D、N、OおよびAにおいて、両群間に若干の相違がみられる。すなわち、事故児群は無事故児群より、抑うつ性が少なく、神経質でないが、客観的傾向および支配性が大きいといえる。

第4表　Y-G検査尺度得点（平均）

尺度＼群	事故児	無事故児	差
D	2.54	2.79	−0.25
C	2.73	2.84	−0.11
I	2.48	2.65	−0.17
N	2.58	2.85	−0.27
O	2.58	2.85	−0.27
Co	2.84	2.76	0.08
Ag	2.91	2.92	−0.01
G	3.01	3.05	−0.04
R	3.01	2.96	0.05
T	2.79	3.00	−0.21
A	3.26	3.02	0.24
S	3.30	3.21	0.09

第5表　Y-G検査因子得点

因子＼群	事故児	無事故児	差
情緒不安定性	2.58	2.80	−0.22
社会不適応性	2.78	2.76	0.02
活動性	2.96	2.99	−0.03
衝動性	3.01	3.01	0
非内省性	2.90	2.98	−0.08
主導性	3.30	3.12	0.18

つぎに、プロフィールによる全体的類型についてみると、第6表に示したように、両群ともA型（平均型）がもっとも多く、D型（安定適応積極型）がこれにつぐが、A型は事故児の方が無事故児を多少上回り、E型（不安定不適応消極型）はむしろ無事故児の方がやや多いという結果がえられたが、これらは統計的には有意な差とはいえない。

第6表　Y-G検査の類型

型＼群	事故児 実数	事故児 %	無事故児 実数	無事故児 %
A	48	59.3	40	44.0
B	1	1.2	2	2.2
C	8	9.9	11	12.1
D	18	22.2	24	26.4
E	6	7.4	14	15.4

以上の結果からすれば、事故児群と無事故児群の間には、明確な性格特性の差はないといわなければならない。しかし、これはあくまでもY-G性格検査によって測定した性格特性に関する限りであることは言を要しない。このような否定的な結果の下においても、われわれはなお事故というものが$B=f(P \cdot E)$の公式にあてはまる現象であり、したがって、心身の発達にともなう生活空間の拡大と多様化が事故発生の危険性に遭遇する頻度を増大させるというような素朴な考え方にとどまることはできず、「人」の性格特性が事故発生の重要な1要因であるとの考えをすてさることはできない。

つぎに、前記のように、統計的に有意ではないが、事故児に抑うつ性ならびに神経質傾向が少なく、客観性ならびに支配性が大きいという傾向がみられたことは、これらの特性が子どもの生活空間を拡大する方向に作用するものと考えることが可能であり、したがって、事故は単なる性格特性等の「人」の条件からのみ考察するのではなく、あくまでも「人」と環境の両要因の函数として考えていくことが必要なことを示すものということができるであろう。

3. フラストレーション

フラストレーションは、単なる欲求阻止あるいは欲求不満の状態ではなく、積極的に、行動を生ぜしめる緊張

と考えるべきであり、この緊張がいかに解消されるかということが問題とされる。そして、このフラストレーションという事態は、一種の危機的場面であり、精神的不均衡の1つの状態であり、その点においては災害事故の事態と共通なものをもつが、ここにおいては「人」の緊張は極度に高まってくる。この緊張の解消の行動は、その時の場の条件ならびに個人の性格、経験、習慣等の「人」の条件によって異なってくるが、事故者と無事故者によってもその行動に相違が考えられる。

そこでP-Fスタディを事故者群と無事故者群に実施した結果をみると、反応にあらわれる攻撃の方向については第7表のとおりで、全体的にはE（外罰的）に向うものが多いが、両群を比較すると、統計的な有意差はみられないが、事故児にI（内罰的）が少なく、M（無罰的）がいささか多いような傾向がみられる。

Iは、フラストレーションの原因を自分の責任に帰する反応で、この傾向の強い人は、何かにつけて後悔と罪の意識を抱きやすく、自罰的傾向の強い人である。それに対してMは、フラストレーションの原因は誰にもなく、不可避的だと考える反応で、抑圧して攻撃をさける傾向である。

したがって、事故児にIが少なく、Mが多いということは、事故児に自己反省心に欠けるものが多いことを示すものであろう。

つぎに、フラストレーションの反応の様式については、第8表に示したように、大部分のものがE-D（自己防禦型）であるが、事故児の方がわずかながら少ない傾向がみられる。E-Dというのは、フラストレーション場面において、ストレスを解消するために、自我を強調する型である。

第7表　攻撃の方向(実数)

方向＼群	事故児	無事故児
E	55	56
I	11	21
M	11	8

第8表　反応の型(実数)

型＼群	事故児	無事故児
O—D	0	0
E—D	78	86
N—P	2	4

つぎに、基本9因子について、一番多く見られる因子を最多因子として、事故児群と無事故児群を比較したのが第9表である。両群ともEが最も多く、Iがこれについでいることは、上記のところから当然のことであるが、両群の間には有意差は認められない。しかし、Iとeに有意差ではないが、傾向として差がみられた。すなわち、事故児にはIが少なく、eが多い傾向がある。

Iというのは、自責、自己非難の反応であり、これが

第9表　基本9個因子内の最多因子（実数）

群＼因子	E′	I′	M′	E	I	M	e	i	m
事故児	1	0	0	43	23	4	7	2	0
無事故児	1	0	0	43	33	6	5	2	0

著しく高い人は、フラストレーションの原因をすべて自己の側に求め、そのため社会への適応が困難になることもあるが、反対にこれが低い人は自責の念に乏しく、自己反省心に欠けるとされている。eは、フラストレーションを解決するのに、相手が解決してくれるのを待ったり、相手に解決を求めたりする傾向を示し、これが高い人は、必要以上に相手の解決に依存的であり、あるいは自分の方から援助、助力を求める傾向が強いことを示している。

したがって、事故児は自己反省心に欠け、問題解決のために他人の助力を求める傾向が強いという傾向を示している。

つぎに、攻撃の方向と型を組み合わせたのが第10表である。ここでも統計的な有意差はみられなかったが、両群の間に、IのE-Dが事故児群に少なく、MのE-Dがわずかながら事故児群に多いという傾向がみられる。これも、事故児が、物事に対して自分のせいじゃないという反応を示しがちであることをあらわすもので、いいかえれば、自己反省心に欠けるともいうことができるであろう。

第10表　方向と型の組み合わせ（実数）

方向	群＼型	O-D	E-D	N-P
E	事故児	0	54	1
	無事故児	0	55	1
I	事故児	0	10	1
	無事故児	0	19	2
M	事故児	0	11	0
	無事故児	0	7	1

つぎに、超自我因子GCRとについて事故児群と無事故児群を比較した結果が第11表である。ここでも両群の間に有意差はみられないが、$\underline{I}$とM＋$\underline{I}$が事故児群に大きく、I－$\underline{I}$が事故児群に小さいという傾向がうかがわれる。

$\underline{I}$が高い人は、とかく自己保身的で、一応悪いと思いながらも、あれこれといいのがれ、いいわけをし、本質的には自分の失敗をなかなか認めようとしない傾向が強

第11表　超自我因子およびGCR（%）

因子＼群	事故児	無事故児
E	6.69	6.52
I	7.08	5.84
E＋I	13.87	12.36
E－E	18.94	19.50
I－I	12.73	14.68
M＋I	33.77	30.89
GCR	56.08	56.18

いことをあらわしている。又I－Iは、自責、自己非難の気持の強さに関係し、これが著しく高いものは、この気持が過剰であることを示し、反対に低いものは、自己反省心が乏しいことを示している。又M＋Iは、社会性や精神発達をみる指標とされている。

したがって、事故児は、自分の失敗を本質的には認めようとしない傾向が強く、また自己反省心が乏しいが、社会性や精神発達に関してはむしろすぐれているということを示している。

また、GCR (Group Conformity Rating) というのは、日常生活でごく普通におこりがちなフラストレーション場面で、どの程度常識的な方法で適応することができるかを示す指標であるが、この点に関しては、事故児と無事故児の間にほとんど差がなく、いずれも標準の値を示している。

以上のP-Fスタディの結果を総合すると、事故児は自己反省心に乏しく、また自己保身的で、いいのがれをし、自分の罪でも「誰のせいでもないんだ」といった無罰的方向にむけてしまう傾向があるように思われる。また、問題解決のために、他人の助力を求め、依頼心が強い傾向がみられる。

自己反省心に欠けるということは、刺激に対して衝動的に反応し、行動の慎重さに欠けるということにつながる。運動能力の未発達あるいは無器用さが事故を招来するということもありうるが、産業災害において、桐原葆見が運動型の人にかえって事故が多いことを見出したり、あるいはDrake, C. A. が知覚テストと反応速度のテストを実施して、知覚テストの成績が標準以下なのに、反応速度の成績が標準以上である者に事故頻発者が多いことを見出しているところからしても、「バランス」の失調が事故者の特性としてうかび上がってくる。

Ⅳ　要　　約

1.　4年生以上の小学生を対象にして、事故児と無事故児を選定し、この両群に田研式親子関係診断テスト、Y-G性格検査およびP-Fスタディを実施した。

2.　親子関係については、父親における干渉型、盲従型および期待型に、母親における消極的拒否型および期待型において、また態度別にみたところでは母親の支配的態度において、事故児群と無事故児群の間に、有意差ならびにそれに近い差が認められた。大ざっぱにいって、事故児群には親子関係の失調が認められ、これが子どもの精神のバランスを失わせ、事故原因の1つとなっていると考えられる。

3.　Y-G検査で測定した性格特性については、有意差は見出せなかったが、事故児群は無事故児群より、抑うつ性が少なく、神経質でなく、客観的傾向および支配性が大という傾向が示された。

4.　P-Fスタディの結果にも有意差は見出せなかったが、傾向としては、事故児群は自己反省心が乏しく、無罰的傾向があり、フラストレーション解決に際して他人に依存的であることが示された。

5.　事故は人と環境の両要因に規定される現象であり、本研究では明確な結果が出なかったが、性格因子が事故に関与するという考え方を否定することはできない。

6.　本研究で性格因子に明確な差が示されなかったのは、取扱った事故の事例が少なかったこと、ならびに事故児の規定が不完全であったことなどによると考えられる。しかし、事故は単一の大きな要因だけから発生するものではなく、むしろ諸種のささやかな要因のダイナミックな協同効果として惹起される場合が多いことを考えると、今後更に緻密な研究の積み重ねが必要と考えられる。

Characteristics of Accident-Prone Children

Dept. 5 Hideo Ishikawa

The purpose of this study is to find some factors influencing accidents involving children.

The Parent-Child Relationship Test, Yatabe-Guilford Personality Inventory and Rosenzweig Picture Frustration Study were administered on eighty accident-prone children and ninety non-accident-prone children from 4 th to 6 th grades.

We find the following results:

1. There are significant differences between the accident-prone group and the non-accident-prone group in father-child relationship types of interference, obedience and expectation and in mother-child relationship types of negative rejection. That is, there are confused parent-child relationships in the accident-prone group, and we consider this factor to be one of the causes of accidents.

2. Although we can't find a significant difference between the two groups in the Yatabe-Guilford Personality Inventory, the children of the accident-prone group are less depressive, less nervous, more objective and more dominant than those of the non-accidnt-prone group.

3. Although we can't find a significant difference between the two groups in the Picture-Frustration Study either, the children in the accident-prone group are less self-reflective, more impunitive and more dependent at the time of resolving frustration than thoes of the non-accident-prone group.